

誇張法と関連性理論

岡 田 聡 宏

はじめに

hyperbole（誇張法）について、成美堂英語学辞典は「強意のため故意に誇張して表現すること」と説明し、以下のような例を挙げている。

- (1) It' a thousand pities that he has failed after so much effort.
- (2) It's ages since I saw you last.
- (3) I'd go through fire and water for that girl.

exaggeration という用語を用いているものの、研究社英語学辞典も説明に大差はなく、日常よく使われるような例を挙げている。

- (4) dying for a cigarette
- (5) It's freezing.
- (6) Literally starving.
- (7) You could have heard a pin drop.

誇張法は頻繁に使われるにもかかわらず、隠喩などに比べ、あまり詳しく論じられていないというのが事実であろう。しかしながら誇張法の分析として突出したものを考えるとすれば、Griceの分析法を見逃すわけにはいかない。

会話を行う際に参加者が遵守する基本原理を協調の原理（Cooperative Principle）と呼び、この原則のもとに4つの範疇の格率（Quantity, Quality, Relation, and Manner）が区別されると主張している。誇張法を

含め、隠喩やアイロニーなどの文彩表現に関しては、この協調の原理によって説明が可能であると言う。Grice によるアイロニーの説明を要約すると、次のようになる。

(8) Aの親友Xがライバルにある秘密を暴露し、そのことをAも会話の相手である聞き手も知っている。このような状況で ‘X is a fine friend’ とAが言ったとすると、Aが協調の原理を守っているかぎり、つまりデタラメをいったのではないとすると、Bの得る解釈は、字義通りのものではなく、その反対の解釈となる。

この例に見られるように、アイロニーなどの文彩表現の場合、まず「質」の格率の違反が想定され、聞き手は字義通りの陳述内容以外の含意内容を推論する。とくにアイロニーの場合は、字義通りの陳述内容とは反対の内容が含意される。誇張法に関しても解釈過程は同じで、字義性の判断、つまり質の格率の違反を判断したのち含意内容を推論する。

(9) Her eyes nearly propped out of her head.

これは驚きの様子を表した誇張表現だが、現実の状況を考えてみるといくら驚いたからといって眼が飛び出すはずはない。したがって話し手が字義通りの内容を伝達していないことを聞き手は判断し、含意内容つまり implicature を求める。

Grice に代表されるように従来分析方法では、誇張法などの文彩表現の理解には、字義性の判断が行われるということが当然のように考えられてきた。つまり通常の会話では格率はすべて遵守されるのであるが、文彩解釈では質の格率の違反が起こるというのである。これに対して ‘War is war’ などのようなトートロジー（類語反復）では量の格率の違反が起こるとしている。しかしながら、このように発話の種類に応じて解釈の方法を変えなく

てはいけないのでは、その分析法の妥当性は低いと言わざるを得ない。これに対し次に示す関連性理論 (Sperber & Wilson) では、文彩解釈において発話が字義通りかどうかということを問題にはしていない。また関連性理論では、関連性の原理という唯一の原理に基づいて聞き手は発話を解釈すると考えているので、あらゆる発話に関して一貫した説明が可能であり、Griceのように文彩解釈を例外的に扱う必要はない。

1. 関連性理論

1 — 1. 関連性の原理

人が発話を行う場合、相手にとって関連性の高い情報を与えようとする。聞き手の側も、相手が関連性の高い情報を与えようとしていると信じることによって、関連性の原理に一致する解釈を求めようとする。関連性とは以下に示すように文脈効果とそれに対する処理労力という2つの概念によって特徴づけられる。

(10) (a) Other things being equal, the greater the cognitive effect achieved by the processing of a given piece of information, the greater its relevance for the individual who processes it.

(b) Other things being equal, the greater the effort involved in the processing of a given piece of information, the smaller its relevance for the individual who processes it.

Sperber & Wilson (1991:544)

つまり、人間はなるべく少ない労力で最大の効果を目指すのである。そしてこの効果とは、相手の認知環境に影響を与えるような効果で、文脈含意・強化・矛盾の3つが考えられる (詳細は Sperber & Wilson 1986)。またコミュニケーションを行うということは、その情報が相手の注意をひくに十分な関連性があるということを意味するものであるから (さもなくば、聞き手はそ

の情報に注意を向けない) いかなる発話も相手に対して「最適な関連性の見込み」を伝達する。これを「関連性の原理」と呼ぶ。

1－2．類似

関連性理論では、Grice と違い、質の格率のような規範を仮定していないので、字義通りでない発話も例外として扱う必要がない。つまり、関連性の高い情報がかならずしも字義的な発話であるとは限らないということである。

(11) Let us say that an utterance, in its role as an interpretive expression of a speaker's thought, is strictly *literal* if it has the same propositional form as that thought. To say that an utterance is less than strictly literal is to say that its propositional form shares some, but not all, of its logical properties with the propositional form of the thought it is being used to interpret. From the standpoint of relevance theory, there is no reason to think that the optimally relevant interpretive expression of a thought is always the most literal one.

Sperber & Wilson (1986: 233)

発話には、真理条件に基づき描写的 (descriptively) に使われるものと、類似関係に基づき解釈的 (interpretively) に使われるものとの両方がある。話し手の目指すことは、字義性の高い情報を伝えることなく、関連性の高い情報を伝えることである。したがって聞き手の側も、つねに字義的な発話を期待しているわけではない。むしろ類似性に基づき解釈的に使われる発話のほうが、字義的な発話よりも、関連性が高くなることがよくある。例えば「(自宅から) 学校までどのくらいかかりますか」という問いに対して、たとえ正確な答えが56分 (あるいは1時間3分) だとしても、答えとしては「1時間です」で十分なのである。この場合、正確な字義的発話のほうが処理労

力もかかり、むしろ関連性が低くなってしまう。正確な情報を期待するような状況は別であるが、単なる挨拶程度の会話の場合、聞き手の側も字義通りの情報を期待しない。

誇張法も含めメタファーなどの文彩表現は、以上述べてきた解釈的発話の一例であると言える。「一例」という表現を使ったのは、(Grice と違い) 文彩表現を他の発話と区別する必要があるからである。関連性理論の強みは、いかなる発話も例外的な扱いをしなくて済むというところにある。

2. 誇張法

2-1. Leech の問題点

関連性理論を用いて具体的な分析に移る前に、従来の分析法の例として Leech (1983) を挙げ、その問題点について考察してみたい。Leech のアプローチの仕方も Grice に基づいているので、基本的に Grice と同じ問題点を持っていると言える。Leech は Grice による協調の原理を補う形で「丁寧さの原理」を仮定している。

(12) However, the CP in itself cannot explain (i) *why* people are often so indirect in conveying what they mean; and (ii) what is the relation between sense and force when non-declarative types of sentence are being considered.

Leech (1983:80)

以上のような問題点を解決するために、Leechは丁寧さの原理が必要であると主張する。

(13) Politeness Principle (PP)

Minimize (other things being equal) the expression of impolite beliefs
Maximize (other things being equal) the expression of polite beliefs

Leech (1983:81)

それでは、このPPを使った解釈例を見てみよう。

(14) A: We'll all miss Bill and Agatha, won't we?

B: Well, we'll all miss BILL.

(15) P: Someone's eaten the icing off the cake.

C: It wasn't ME.

Leech (1983:80)

まず (14) であるが、B の発話は量の格率に違反する。なぜなら A の問いに対して部分的にしか答えていないからである。このことから A は含意として「すべての者がアガサのいなくなったことをさびしく思っているとは限らない」を導き出す。しかしなぜ B は「アガサはそうではない」と直接言わないのだろうか。その理由は丁寧さの原理にあると Leech は主張する。つまり、B は丁寧さの原理を守るために失礼にあたる情報を押さえたのである。次に (15) を見てみよう。P は C が食べてしまったことを密かに疑いつつ、丁寧な態度を維持するために、you の代わりに someone を使っているのである。C の答えは一見関与性の格率 (Maxim of Relation) に違反しているように思えるが、実はPの間接的な非難に対して反応しているのである。

以上のように、Leech は協調の原理に加え、丁寧さの原理が会話の調節機能として働いていると仮定しているのである。この PP に基づいて、Leech はアイロニーなどの文彩表現の分析を行っている。

(16) A: Geoff has just borrowed your car.

B: Well, I like THAT!

Leech (1983:83)

そして、B の発話の含意は次のようになると言う。

(17) What B says is polite to Geoff and is clearly not true. Therefore

what *B* really means is impolite to Geoff and true.

Leech (1983:83)

アイロニーの例の場合、協調の原理と丁寧さの原理との間で衝突が起こる。つまり *B* の一見丁寧な発話によって質の格率が破られる。この際丁寧過ぎる *B* の表現により、聞き手は新たな解釈を求める。つまりそのようにして求められた含意がアイロニーとなる。

(18) IRONY PRINCIPLE (IP)

If you must cause offence, at least do so in a way which doesn't overtly conflict with the PP, but allows the hearer to arrive at the offensive point of your remark indirectly, by way of implicature.

Leech (1983:82)

つまりアイロニーの場合、いったん丁寧さの原理の利用を介して、隔たったレベルで協調の原理を遵守することになるのである。

(19) In being polite one is often faced with a CLASH between the CP and the PP so that one has to choose how far to 'trade off' one against the other; but in being ironic, one EXPLOITS the PP in order to uphold, at a remoter level, the CP.

Leech (1983:83)

またアイロニーは、陳述内容と反対の意味を含意するという機能以外に、丁寧さの原理を介することで、攻撃性を弱めるという機能も併せ持つとする。

(20) Although it appears to be dysfunctional, in providing a method of being offensive to others, the IP may well have a positive function in

permitting aggression to manifest itself in a less dangerous verbal form than by direct criticism, insults, threats, etc.

Leech (1983:143-4)

これまで PP について見てきたが、今度はその問題点に触れたいと思う。コミュニケーションにおいて、たしかに丁寧な振舞うということは重要かもしれないが、それが根本的原理だとは考えられない。相手を攻撃・非難したりする場合、あるいは言い争いをするような場合は、丁寧さが無視されることが多い。またアイロニーの原理では ‘If you must cause offence, at least do so in a way which doesn’t overtly conflict with the PP’ とあるが、逆にアイロニーによって攻撃性や辛らつ度が増すこともある。

(21) (ハムレット) からかつてはいけな、学友じゃないか。母上のご婚礼を拝観しようと思ったのだろう。

(ホレーシオ) そう言えばほとんど間もおかずに。

(ハムレット) 儉約、儉約だよ、ホレーシオ、そのために、葬式用のパイが冷たくなって婚礼の食卓を飾ったのだ。あのようなつらいめに会うぐらいなら、天国で憎い敵と会うほうがましだったぞ、ホレーシオ。父上が一父上の顔が目に見えるようだ。

『ハムレット』 1 幕 2 場(小田島雄志訳)

Leech も格率の違反を想定するという Grice と同じ問題点を持っているが、丁寧さの原理を付け加えることによって、さらに原理を複雑にし問題を広げてしまっている。つまり、格率だけでなく丁寧さの原理も遵守されない場合があるので、例に合わせてその都度新しい原理を加えていく必要がでてくる。誇張法に対する説明にもそのような傾向が見られる。

Leech は誇張法に関しても丁寧さの原理が根本で機能しているとし、誇張法が使われるのは丁寧な信念を大げさに表現したいような場合に多いと言う。

(22) That was a delicious meal!

それでは次のような例はどうだろう。

(23) 坂東武者は馬のうへでこそ口はきき候とも、舟軍にはいつ調練し候べき。
魚の木にのぼ(ッ)たるでこそ候はんずれ。

『平家物語』

(24) *Demetrius*. I'll run from thee and hide me in the brakes,
And leave thee to the mercy of wild beasts.

Helena. The wildest hath not such a heart as you.
Run when you will; the story shall be chang'd

A Midsummer Night's Dream II. i.

(25) *Lysander*. Thy love! Out, tawny Tartar, out!
Out, loathed med'cine! O hated potion, hence!

A Midsummer Night's Dream III. ii.

(23) の例は平氏の武者による源氏の武者に対する誇張法である。自分たちの舟軍での優越性と、相手(敵)の不慣れな様子が殊更に強調されている。(24) では、デミートリアスのつれなさをヘレナが強調し、野獣のほうはまだましだと言う。(25) では、パックによる混乱のためライサンダーの気持ちが豹変する。その気持ちの変化を強調するために、ライサンダーの言葉には辛らつな誇張法が使われている。また、この例では隠喩が誇張表現となっていることを付け加えておく。以上3つの例はすべて丁寧さの原理に反するものである。誇張法に限らず人間のコミュニケーションには多用な表現が使われるので、Leech の丁寧さの原理がすべての例にあてはまるとは言えない。これに対し、Leech 自身も次のような例を挙げ、誇張法のすべての例が丁寧さを強めているわけではないことを認めている。

(26) Her eyes nearly propped out of her head!

(27) It makes my blood boil.

(28) That'll cost the earth.

このような例を説明するために、Leech はさらに新たな原理を追加する。

(29) A Conversational principle which seems to underlie such cases is the principle which enjoins us to

‘Say what is unpredictable, and hence interesting.’

At the risk of proliferating too many pragmatic principles, I shall tentatively propose, then, an Interest Principle, by which conversation which is interesting, in the sense of having unpredictability or news value, is preferred to conversation which is boring and predictable.

Leech (1983:146)

Leech は Grice の持つ問題点をそのまま踏襲したのみならず、CP を補う形で丁寧さの原理 (PP) を追加し、さらに PP では説明できないものには、IP などの原理を追加した。Leech の最大の問題点は、このように事例に応じて様々な原理を仮定したことにある。多くの原理で補わなくてはならないということは、根本原理が妥当性を欠いているという1つの証拠である。これに対し関連性理論では、1つの原理で統一的な説明ができる。次に関連性を用いて誇張法の分析法を示したい。

2-2. 誇張法と関連性理論

これまでアイロニーを中心に文彩表現について触れてきたが、関連性理論ではこれら文彩表現を特別扱いすることはない。他の表現と同じように、関

連性の原理という単一の原理に基づいて、聞き手は誇張表現の解釈を行うのである。それではまず『坊ちゃん』からの引用を検討してみよう。

- (30) (一時間あるくと見物する町もない様な狭い都に住んで、外に何も芸がないから) 天麩羅事件を日露戦争の様に触れちらかすんだろう。
 (31) 野だの御世話になる位なら首をくくって死じまわあ。

これらの発話はいったい何を意味しているのだろうか。(30) では、どんな些細な行動でも見逃さず大騒ぎする生徒たちの様子について触れている。(31) では、自分が軽蔑する野だに対しての嫌悪感を表している。たしかに「天麩羅を食べたことを大騒ぎする」と「野だの世話にはなりたくない」ということをそれぞれ意味しているわけではあるが、言いたいことはそれだけではない。もしそれだけならば、(30)・(31) の発話の代わりにはじめから「天麩羅を食べたことを大騒ぎする」と「野だの世話にはなりたくない」と言えばいい。そうすれば相手の側も（ここでは読者）その分の労力を省くことができる。天麩羅を食べたことを事件と呼び、大騒ぎする様子を日露戦争にたとえたりするには、やはりそれなりの意味がある。つまり(30)・(31) は「天麩羅を食べたことを大騒ぎする」と「野だの世話にはなりたくない」という内容以上のことを伝えているのである。(30) では、どんな些細なことでも国家的な重大ニュースのように騒ぎ立てる生徒たちの様子に対しての怒り・軽蔑・呆れなどの様々な意味を表しているのである。(31) では、野だに対する軽蔑や嫌悪だけでなく、江戸っ子（主人公）の短気さなども表している。またこれら2つの発話は、両方ともユーモアを含んでおり、それを読者に伝えるという効果も併せ持つ。つまりこれらの例では「天麩羅を食べたことを大騒ぎする」と「野だの世話にはなりたくない」という強い含意に加え様々な弱い含意も伝えているのである。

- (32) We might think of communication itself, as a matter of degree.

When the communicator's informative intention involves making a particular assumption strongly manifest, then that assumption is *strongly communicated*. When the communicator's intention is to marginally increase the manifestness of a wide range of assumptions, then each of them is *weakly communicated*.

Sperber & Wilson (1986:59-60)

たしかにこのような発話を解釈するには直接表現よりも労力がかかるかもしれないが、そのような処理労力以上の効果（様々な含意）が期待されるのである。それでは聞き手（読者）による解釈はどこまでも続くのだろうか。それを決定するのが関連性の原理である。つまり労力を補ってあまりある効果が期待されない場合は、それ以上処理を続けないのである。例えば(30)で、「日露戦争」が日本海海戦や奉天会戦などの具体的な戦闘に及ぶまでの解釈を話し手は期待していない。これでは労力が増えるだけで、効果が得られない。関連性の原理に基づき、効果に対して労力が大きくなりすぎる前に、聞き手（読者）は解釈をすることをやめるのである。これが関連性に一致する解釈となる。

それでは様々な例を通して、関連性の立場から誇張法について整理して考察してみたい。誇張表現の中には、誇張法とあまり意識されことなく頻繁に使われる表現も多い。「一日千秋」、「月と鼈」、「白髪三千丈」、「一騎当千」などがその例である。このような誇張表現は頻繁に使われることによって、もとの意味があまり意識されなくなるが（つまりもとの効果が期待できなくなるが）その分の処理労力が減じられる。

(33) ありがたき強弓精兵、馬の上、かちだち、打物も(ッ)ては鬼にも神にもあはうどいふ一人当千の兵なり。

『平家物語』

驚きを表す表現にも様々ある。「心臓が止まるほど驚いた」というのは馴染み深い例であるが、以下の例はどうだろう。

- (34) 僕の心臓が思わずとびあがって肋骨にぶつかった。
- (35) そのときのぼくの気持ちを、いったいどういいあらわせればいいだろう。よく「心臓が停りそうになるほど驚いた」というけど、そのときのぼくの心臓は「停りそう」どころか、完全に停ってしまっていた。
- (36) そのことを考えるとそのたびに心臓がびよんぴよん跳ね上がり、汗がどっと吹き出してくるからだ。

井上ひさし『偽原始人』

井上ひさしはこれらの表現を使って驚きを表している。なぜならば「心臓が止まる」という聞きなれた表現（誇張表現）では言い表せない、さらに大きな驚きを言い表したいからだ。つまりさらに大きな効果をねらってこれらの誇張法を使っているのだ。

次の例は、驚きではないが、体の中に起こった複雑な衝撃を表している。

- (37) 川路は体腔のなかの血液が一時に化学変化をおこしたほどの衝撃を感じた。

司馬遼太郎『翔ぶが如く』

桐野利秋は幕末期に人斬り半次郎と恐れられた男である。その桐野に（斬られるかもしれない）と思った時の川路利良の心境（衝撃）を司馬はこのように表現している。身に寸鉄も帯びてはいないとはいえ剣には自信があり、死をも覚悟した川路の状態を考えると、この表現には、恐怖・緊張・興奮など様々な感情が集約されているように思われる。このように強烈で複雑な感情を言い表すには、誇張法も含めて並みの表現では不十分なのである。同じく司馬からの例を見てみよう。これは項羽と劉邦が対峙中に、漢軍のローファ

ンという男が項羽を弓で狙う場面である。

(38) が、敵は肉体ではなかった。気が凝って渦を巻き、そのまわりが炎のように燃えている一個のおそろべきなにかだった。甲冑の金鉾がかがやき、朱が燃え、盔の目庇の銀が陽をするどく挑ねかえしていたが、それよりもすさまじかったのは、炬のような両眼であった。両眼が瞋り、数千の矢のたばをローファンの細い目に射注ぎこんでくるようで、ローファンは正視する能力を喪った。それでもなお弓をひきしほろうとしたとき、巨漢が真っ赤な口蓋をみせて叱咤した。声はすさまじい殺気になってローファンを圧倒し、体中の髓が溶けるように萎えてしまった。

司馬遼太郎『項羽と劉邦』

長くなるのを覚悟で引用したが、項羽の殺気を表現するのに、これだけの長さで量の誇張法を使用している。つまりかなりの労力をかけて、相手に複数の含意を伝えようとしているのである。読者の側も労力を省みず、大きな効果を期待して含意を得ようとするのである。

(39) The sun was not so true unto the day
As he to me. Would he have stolen away
From sleeping Hermia? I'll believe as soon
This whole earth may be bor'd and that the moon
May through the centre creep and so displease
Her brother's noontide with th' Antipodes.

A Midsummer Night's Dream III.ii.

バックの塗った花の汁のせいでライサンダーはヘレナに恋をしてしまう。そのことを知らないハーミアはライサンダーが自分を置き去りにするはずはないと言う。そんなことが起こるくらいなら、月が地球の反対側に抜け出て、

昼を夜にしてしまう話を信じたほうがましだと言うのである。それがいかにあり得ないかを強調するためと、皮肉にもそのあり得ないことが起こってしまった現実との差を浮き出たせるために、少々込み入った誇張法が使われているのである。このためにバックによって生じた変化が強調され、これに表現の面白さも加わり、聞き手は労力をかけてまで関連性の原理に一致する複数の解釈を得ようとするのである。同様のことが次の例にも見られる。しかし今度は、ディミートリアスに起きた変化を強調するために誇張法が使われているのである。

(40) *Demetius*. O Helen, goddess, nymph, perfect, divine!

To what, my love, shall I compare thine eyne?

Crystal is muddy. O, how ripe in show

Thy lips, those kissing cherries, tempting grow!

That pure congealed white, high Taurus' snow,

Fann'd with the eastern wind, turns to a crow

When thou hold'st up thy hand. O, let me kiss

This princess of pure white, this seal of bliss!

A Midsummer Night's Dream III.ii.

『夏の夜の夢』からの例をもう1つだけ見てみたい。

(41) *Theseus*. Now fair Hippolyta, our nuptial hour

Draws on apace; four happy days bring in

Another moon; but, O, methinks, how slow

This old moon wanes! She lingers my desires,

Like to a step-dame or dowager,

Long withering out a young man's revenue.

A Midsummer Night's Dream I.i.

ここでの誇張法は、婚礼まで待ち遠しく時間が長く感じられることを強調しているのだが、もし伝えたいことがそれだけならば、継母の話の部分は不必要かもしれない。労力をかけてまで、なぜこのような表現を使うかと言うと、それは笑いという効果をねらっているからなのである。誇張表現の中には（他の文彩にもあてはまることだが）この例のように笑いという効果を含むものも多い。

42) 割前を出せばそれだけの事で済むところを、心のうちで難有いと恩に着るのは銭金で買える返礼じゃない。無位無官でも一人前の独立した人間だ。独立した人間が頭を下げるのは百万両より尊とい御礼と思わなければならない。おれはこれでも山嵐に一銭五厘奮発させて、百万両より尊とい返礼をした気でいる。山嵐は難有いと思って然るべきだ。

『坊ちゃん』

43) 鬚を剃る間は首の所有権は全く親方の手にあるのか、将た幾分かは余の上にも存するのか、一人で疑い出した位、容赦なく取り扱われる。余の首が肩の上に釘付けにされているにしてもこれでは永く持たない。

『草枕』

42) では、山嵐におごってもらった氷水代一銭五厘を大げさに表現している。著者が読者に期待することには、坊ちゃんの頑固さや短気さに加えてユーモアを理解することも含まれている。43) の表現にも、同じくユーモアが込められている。以上のように、誇張法には労力がかかる場合が多いが、これは効果の大きさによって補われる。したがって表現が的確でない場合などは、効果よりも労力のほうが大きくなってしまいうので、結果として関連性の低い発話となってしまう。

3. うそと誇張法（むすびにかえて）

うそと誇張法について触れる前に、いままで述べてきたことを簡単にまと

めてみたい。本稿では、まず Grice の格率（とくに質の格率）に対する考え方を否定し、発話はかならずしも字義通りである必要がないことを強調してきた。発話には真理条件に基づく description と類似関係に基づく interpretation があり、文彩は後者の例である。したがって誇張法を理解するには字義性の判断を介さず、関連性の原理に一致する解釈を得ようとするだけなのである。この関連性は効果と労力のバランスによって決定され、関連性の高い発話とは少ない労力で大きな効果を挙げるものを言う。誇張法に関して言えば、労力にかかるが、その分聞き手の側は大きな効果を期待できるような場合が多い。つまりこれまでの例によって示してきたように、複数の含意による効果が期待できるのである。もちろん聞き手は際限なく解釈を行うのではなく、一度関連性の原理に一致する解釈を得たら、それ以上の解釈は行わないのである。以上、本稿の趣旨を簡潔にまとめてみたが、最後にうそと誇張法の関係について述べたいと思う。

佐藤信夫（『レトリック感覚』）はデユマルセなどを例に挙げ、昔から理論家たちの間には誇張法はうそをつくことばだという大前提があることを指摘している。それがうそは罪悪であるという小前提によって、誇張法は罪悪であると結論づけられていたようである。この考え方を整理すると、ここでのうそとは発話の字義性について言っているらしい。つまり古典的理論家たちの間にも「自分の信じていないことを言っはいけない」というような考え方が前提としてあったようだ。結局 Grice の言っていることと基本的に同じなのである。Grice の説を否定したように、発話は字義通りである必要はない。誇張法自体は解釈的に使われているだけで、相手を騙そうとしているわけではない。どうやら、古典的理論家たちはうそ（字義通りでない発話）と相手を騙すうそ（悪徳としてのうそ）とを混同してしまっていたようだ。

44) しかし、真相はまるでちがう。人をだますための本当のうそは、うそらしくなく語られなければならない。過大に誇張しても、それが過大だといことがばれないように…仕上げられていなければ、うそとして役に立たぬはず

だ。誇大広告が非難されるのは、とりもなおさず、それが誇大でないふりをしているからであり、けっきょく、人の好い消費者の目には誇大広告と移らぬからであった。悪徳としての誇張は、決して誇張法の表現をまともぬことを特徴としている。

佐藤信夫『レトリック感覚』

佐藤の言うように、たしかに悪徳としての誇張は誇張だと気づかれないうようにしてあるはずだ。しかしさらに大事なことは、うそをつく場合、相手を騙そうという意図を知られないようにしているということである。

(45) その美しさが減じるなどと、この目がどうして我慢できよう。こうしておそばにいる以上、そのようなことはおさせ出来ぬ。全世界が太陽のおかげで輝いている、同様、リチャードもそのお顔ゆえに。それこそ、この身にとって、真昼の輝き、命そのもの。

『リチャードⅢ世』1幕2場（福田恆存訳）

アンを手に入れるために、グロスターはありとあらゆる表現を使う。この場合誇張については気づかれる可能性もある。しかし、グロスターは騙そうという意図がアンに悟られないように振舞っていることだけは確かだ。少なくとも、アンに対する気持ちは真実であるかのように振舞っているはずだ。

(46) Hyperbole rules in Tokyo poll frenzy

A local edition of Wednesday's Asahi Shinbun ran a *senryu* satirical verse that poked fun at the hyperbolic language of some of the candidates in the upcoming Tokyo gubernatorial election

これは朝日新聞天声人語（英語訳）の冒頭である。つまり都知事選候補者の「大仰なものの言い」について言及しているのである。ここでも誇張法には悪

いイメージが付き纏っているようである。しかしここで問題になっていることは、誇張法が使われていることではなく、それが使われる場所（コンテキスト）なのである。選挙戦では、候補者が使う言葉はすべて公約ととられる可能性がある。つまり、このように限られたコンテキストでは、Griceではないが発言はすべて真であることが期待される。したがってあまり大風呂敷を広げると、「誇大広告気味の言辞」と受け取られてしまう。もちろん候補者本人は、すべて約束のつもりで言っており、誇張などはしていないのかもしれない。この場合、原則としてすべて実行する義務があるので聞いているほうが可能性を疑っていることになる。あるいは自分の優秀さを都民に理解してもらうために誇張法が使われているということも考えられる。この場合、そういう意味での誇張法は成立するかもしれないが、選挙というコンテキストの中では、公約違反につながるの、やはり結果的には「うそ」をついていることになる。もう1つの可能性は、実行するつもりもないのに実効すると言っている場合である。これもやはり「うそ」になる。いずれにせよ、選挙という限られたコンテキストの中では、もし実行できなければ「うそ」ととられる可能性が高く、少なくともこの新聞の中で ‘hyperbole’ と呼んでいる表現はどれも、本当の意味での誇張法にはあたらない。

参考文献

- Sperber, D. and D. Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.
- Sperber, D. and D. Wilson (1991) “LooseTalk.” In S. Davis eds., *Pragmatics*. 540–590. Oxford University Press.
- H. P. Grice (1991) “Logic and Conversation.” In S. Davis eds., *Pragmatics*. 305–315. Oxford University Press.
- G. Leech (1983) *The Principles of Pragmatics*. Longman Linguistics Library